

ライフストーリー調査法に基づく日本の電子楽器受容研究

大阪芸術大学 大学院 嘱託助手 藤野 純也

日本の電子楽器受容研究の現状と問題点

日本の電子楽器の発達史に関しては、学術的な研究がほとんどなされないまま、1970年代の初めに日本の楽器メーカー各社が発表したシンセサイザーを、アメリカの電子楽器メーカーが開発した楽器に後続するものとして位置付ける見方が暗黙のうちに定着している。

2019年に国立科学博物館が実施した『電子楽器の技術発展の系統化調査』の報告論文においても、高価で扱いが難しい欧米のシンセサイザーを、日本の電子楽器メーカーが安価で、扱いやすい普及型の楽器へと改良したという側面が強調されている。

実際、戦後日本の電子楽器産業における民生化志向がシンセサイザーの普及に貢献したという一面があることは確かである。

だが、このような「改良史観」のもとでは、先行者を「オリジナル」として絶対視するというミスリードを起こしがちである。実際、1950年代の終盤から60年代全体を通して、日本には電子オルガンを中心とした業界が成立していたにも関わらず、その実態や、1970年代のシンセサイザー開発との連続性が問われることのないまま「シンセサイザー以前」の日本の業界があたかも空白であるかのように扱われてきた。

聞き取り調査の対象

そこで、本研究では日本の電子楽器業界草創期から国内メーカーで電子楽器の開発に携わっている2名の技師への聞き取り調査を実施し、その語りの分析を行った。

A氏は『無線と実験』に電子オルガンに関する記事を執筆し、同誌を発行する誠文堂新光社の仲介で「電子楽器研究会」を主宰するなど、初期の業界においてリーダー的な立場にあった。A氏の一回り下の世代にあたるB氏は学生時代にA氏の研究会に参加したことがきっかけで楽器メーカーに就職し、のちに最初の国産シンセサイザーとされる楽器を設計している。

「アマチュアイズム」からシンセサイザーへ

当時の電子工業は全般的にアマチュアとプロの境がほとんどなく、アマチュアも業界にもぐりこむことが可能な時代であった。それと同様に、初期の電子楽器業界も『無線と実験』のようなラジオ雑誌を介して、プロとアマチュアの隔たりなく形成されていた。

A氏とB氏の語りにおいても「プロ」と「アマチュア」を区別する言説が度々みられる。語りにおいて「プロ」とみなされるのは、大手楽器メーカーや家電メー

カー、音響メーカーであり、その他は商売をしている場合でも「アマチュア」として認識されている。

両名の語りからはプロとアマチュアの隔たりがなかった時代だとはいえ「区別」はされていたことが窺われる。大手楽器メーカーの電子オルガンの開発に携わっていたA氏は、アマチュアの作る楽器のほとんどは「商売にならない」と述べる一方、B氏は当時の自身を「アマチュア」に位置付けた上で、当時のアマチュアが作ろうとしていた楽器、大手メーカーの製品とは異なることを語っている。

「プロ」が、売れるものを作らなければならない立場であるとするれば、「アマチュア」は純粹に自分が面白いと思うものを作ることのできる立場だといえる。

B氏の語りではしばしば「電子回路で音を作ることの面白さ」が強調され、とりわけ、60年代の中頃にギター用のエフェクター開発を通じて培われた経験は後のシンセサイザーの時代まで影響を及ぼしているという。

すなわち、最初の国産シンセサイザーは、これまで考えられていたように単にアメリカのシンセサイザーの影響によるものではなく、1950年代の後半に製造が始まる電子オルガンに、アマチュアイズムの元でなされた種々の実験の成果が加わったことで誕生したのである。

今後の課題

本研究の成果の一部は2019年10月20日に大阪大学で行われた日本音楽学会第70回全国大会で発表された。日本の初期の電子楽器業界において、主軸となる製品が電子オルガンからシンセサイザーへと移行するプロセスの中に、エレキギターのエフェクター開発があることを明らかにできた点は有益であった。

今後はグループ・サウンズなど当時の音楽文化とも関連付けるなど、より音楽学に近い立場からの研究も行う必要がある。

口頭発表

藤野純也『戦後日本の電子楽器業界の形成とその様相—電子オルガンからシンセサイザーへ』日本音楽学会第70回全国大会, 2019年10月20日

参考文献

北口 二郎「電子楽器の技術発展の系統化調査」『技術の系統化調査報告』vol.26, 国立科学博物館, 2019